

悠遠の昔、人類の最大の課題は自然の脅威を克服する事でありました。私達の先人は厳しい自然環境と戦い試行錯誤を繰り返しながら、一歩一歩生活しやすい環境を作り上げてまいりました。そして現在、私達人類は高度な文明社会を築き上げいわば繁栄の頂点とも言える状況をむかえております。しかし一方では人類が自ら生み出したとも言える種々の問題もまた起こりはじめております。過度な開発による自然破壊や公害等の発生、極度に緊張した社会生活に伴うストレスの蓄積、ノイローゼ等の心の病の増加など、その一面を見ただけでもその内容は非常に深刻なものがあります。古くから『温故知新』と言う言葉があります。文字通り昔の事を訪ね求める事によって新しい見解や知識を得る事ですが、私達が行う発掘調査によって先人達の足跡を学び、原点に立ち返ってみる事が、私達がこれからとるべき道を選ぶ道標の一つになるとすれば本当にすばらしい事ではないでしょうか。私共は常々その様な夢と願いを持って発掘調査を続けて参りました。今回刊行させていただく事になりました「白ケ原遺跡発掘調査報告書」にもその様な願いが託されております。

臼ケ原遺跡は、村道改良工事に先立って、原村教育委員会が昭和53年3月1日から31日にかけて発掘調査を行ったものであります。

発掘調査から報告書刊行に至るまで大変な御尽力を頂いた関係各位に対しまして深甚なる謝意 を表します。

昭和62年3月31日

原村教育委員会 教育長 平林 太尾

例 言

- 1. 本報告は、村道改良工事に先立って実施した、長野県諏訪郡原村柏木に所在する臼ケ原遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2. 発掘調査は、原村教育委員会が昭和53年3月1日から31日にかけて実施した。
- 3. 現場における遺構実測と記録・写真撮影・遺構トレース・編集は平出一治、土器の拓本は 平林とし美、石器実測・トレースは高見俊樹が行い、執筆は武藤雄六と平出が話し合いのも とに行った。
- 4. 本調査の出土遺物・記録等はすべて原村教育委員会で保管している。

目 次

序		小竪穴 3
例	言	小竪穴 4
目	次	小竪穴 5
I	発掘調査の経過	… 1 小竪穴 6
	1 発掘調査に至る経過	小竪穴 7
	2 調査の経過	小竪穴 8
II	遺跡の立地	… 4 2 縄文時代の遺物
	1 遺跡の位置と環境	土 器
	2 過去の調査	石 器
III	発掘調査の概要	… 4 3 平安時代以降の遺物
	1 グッリドの設定	土器と陶器
	2 発掘の状況と土層	V 小竪穴について16
IV	遺構と遺物	··· 7 VI 結 語······20
	1 縄文時代の遺構	
	小竪穴 1	参考文献
	小竪穴 2	発掘調査団名簿

I 発掘調査の経過

1 発掘調査に至る経過

村内における農業の近代化の波は著しく、大型機械が使用される機会は多くなる一方で、幅の狭い従来の農道では不便を来たすことが年々多くなり、農道の拡張工事はあとをたたない状況である。

たまたま、臼ケ原遺跡が立地する尾根の中央やや北寄りにも、古くから尾根と同方向に走る幅 員が狭い農道があり、ここも例外ではなく、昭和52年度に拡張工事が計画された。

村教育委員会では、遺跡保護にたいする検討を行うなかで、工事の主体者である原村役場建設 課と協議を進め、記録保存のための緊急発掘調査を昭和52年12月に実施することにした。

しかし、昭和52年11月に発掘調査に着手した前尾根遺跡(発掘当時は上前尾根遺跡と呼称)の調査が、当初の計画より大幅に長引き、本遺跡の発掘調査は冬期間に入り、実施困難の状況になってしまった。そこで、関係者と再協議を行い発掘の時期を延期し、昭和53年3月1日から31日にわたって緊急発掘調査を実施した。

2 調査の経過

発掘は、長野県諏訪郡原村6549番地1、原村教育委員会教育長松沢達が発掘責任者となり、発掘担当者には日本考古学協会員の武藤雄六と原村教育委員会の平出一治が当たった。

発掘日誌

昭和53年2月21日 発掘準備をはじめる。作業は地元柏木区の人たちにお願いすることとし、作 業員の募集をはじめる。

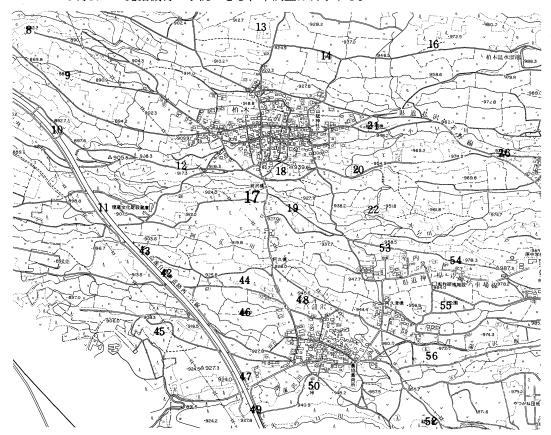
試掘穴を掘り土層の観察を行う。表土層 (耕作土層) は $16\sim20$ cm、黒褐色土層が $6\sim13$ cmの厚さがある。その下にソフトローム層が認められた。表土の取り除きは重機で行うことにし、重機の手配をする。

- 2月27日 重機により表土剝ぎをはじめる。
 - 発掘機材の搬入とテントの設営。表土剝ぎの終わった東側からグリッドの設 定をはじめる。
- 2月28日 グリッドの設定。 9時頃から雪が降りはじめる。10時頃には雪が多くなった ため作業は半日とする。
- 3月1日 発掘開始にあたって教育長挨拶のあと、A地区からグリッドの平面発掘をは じめるが、風が強く作業は思うように進まない。今日も、10時頃には小雪が 降りはじめたため、作業は半日とする。

- 3月2日 A地区・B地区のグリッド発掘。午前中に黒曜石2点、午後1点出土する。 小竪穴1・小竪穴2を検出する。午後から小竪穴2の精査を行うが、遺物の 発見はない。青沼博之・村上孝両氏がみえる。南信日々新聞の取材。
- 3月3日 A地区・B地区のグリッド発掘。黒曜石1点出土。小竪穴3・4・5・6を 検出する。
- 3月6日 発掘担当者(武藤)の話しの後、B地区・C地区のグリッド発掘と小竪穴の精査。

小竪穴の土層観察を行い実測をはじめる。 長崎元広氏がみえる。

- 3月8日 B地区・C地区のグリッド発掘と小竪穴の精査。小竪穴7・8を検出する。 小竪穴の写真撮影。
- 3月9日 今日から作業員は2人とし、小竪穴の精査・写真撮影および実測。
- 3月13日 グリッドの杭等を抜き片付けをはじめる。作業は半日。
- 3月14日 発掘機材の撤去をする。作業は半日。
- 3月30日 発掘機材の水洗いをし、本調査は終了する。



第1図 臼ケ原遺跡の位置と付近の遺跡(1:20,000)

表1. 臼ケ原遺跡と付近の遺跡一覧表

			旧	縄		文		弥	古奈		平	中	近					
番号	遺	跡	名	石器	草	早	前	中	後	晩	生	墳	良	安	世	世	備	考
8	比上	丘尼原	京北			0	0							0				
9	比	丘尼	原					0						0				
10	柏	木	南	0			0	0						0			昭和51	年発掘調査
11	阿		久		0	0	0	0	0					0			国史跡	昭和50~53年発掘調査
12	前		沢			0		0						0			昭和55	・61年発掘調査
13	長		峰					0						0				
14	裏	長	峰					0										
16	恩	膳	南											0				
17	臼	ケ	原			0		0						0	0		昭和53	年発掘調査
18	前。	尾框	透					0										
19	南		平					0										
20	前	尾	根					0	0					0			昭和44	·52·53·59年発掘調査
21	上是	引汗是	 【根					0										
22	清		水					0										
26	家		下					0						0				年発掘調査
42		沢尾						0						0				~52.56年発掘調査
43	中一	团	久					0									昭和51	年発掘調査
44	原	_	山					0						0			u	A . THE LITTLE SHOP . L.
		原日		0				0	0					0			昭和58	年発掘調査
46	宿		尻、			_	_	0						_			077.£n=1	수 장사로 끌려 수
47	ヲ	シ	+			0	0	0						0			L□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□	年発掘調査
48	楡	の	木			•	•	0						^		0	ロガチロこへ	左 戏坛 調木
49		σ	石地	0		O	0	0	0					0		0		年発掘調査 年発掘調査
50	山水	の掛	神平					0	0					0			н <u>п</u> ↑µ 04∙	十一元 7/6 1/16 1/19(15)
53	派雁	頭	沢					0						J		0	旧乙未ロらん	•57年発掘調査
54	宮	頭ノ	下			0		0						0	0	0		•58年発掘調査
55	中	尾	根			J		0	0					0	J		PHAMP1	
56		^定 前尾						0	•					0				

II 遺跡の立地

1 遺跡の位置と環境

臼ケ原遺跡 (原村遺跡番号17) は、長野県諏訪郡原村柏木区の南方に位置している。遺跡は東の八ケ岳から流下する大早川と阿久川にはさまれた、東西に細長いやせ尾根から北に発達しているなだらかな斜面に立地している。付近一帯の地目は普通畑で、遺物の散布範囲はあまり広くないようである。なお北側を流れる大早川の沢は浅く水田として利用されている。標高は925m前後を測る。遺跡の保存状態については取り立てて述べることはなく普通である。

このあたりは八ケ岳西麓のほぼ中央にあたり、付近には縄文時代を中心とする大小さまざまな 遺跡が分布していることは古くから知られていた(第1図、表1)。

それらの中ですでに発掘調査が実施され、その性格が把握されているものの中には、第1図11の阿久遺跡(国史跡)、20の前尾根遺跡、42の居沢尾根遺跡、49の大石遺跡、50の山の神遺跡などがあり、それぞれ時期は異なるものの、環状ないしは馬蹄形をなす当地方を代表する大集落跡も発見されている。

2 渦去の調査

本遺跡が発見されたのはそう古いことではなく、昭和48年から諏訪清陵高等学校地歴部考古班の諸氏が実施した、村内の遺跡分布調査の折に、土師器の破片5点を採集したことにはじまっている。報告では「規模は小さいが、原村には珍しく、土師器の時代の単一遺跡として重要である。」としている。

その後はこれといった踏沓および調査はされることがないまま本調査に至った。

III 発掘調査の概要

1 グリッドの設定

重機で表土を取り除いた後に、道路の測量基準クイを基点に東西南北に軸を合わせた 2 m四方を 1 単位とした基準方眼のグリッドを設定した。東西方向には50mの大地区を設け、東からA地区・B地区・C地区というようにアルファベットを用いて地区割りをした。大地区の中をさらに 2 × 2 mの小地区 (グリッド) に分割し、東西方向は東からA~Yのごとく区分した。南北方向には算用数字をふったが、遺跡の中心と思われるラインを51とし、そのラインを基準に南方向は52・53・54というように南に行くにしたがい大きくなるように、北方向は50・49・48と小さくなるよ

うに振り分けた。

個々のグリッドの呼びかたは、北半分を調査しただけのグリッドで例は悪いが、第3図の調査 区南西外れのグリッドについては、大地区はC地区であり、小地区の東西方向はGラインにあたる。

南北方向が40ラインで、それは「G-40」となる。したがって、小地区の前に大地区を表記した「CG-40」となる。

2 発掘の状況と土層

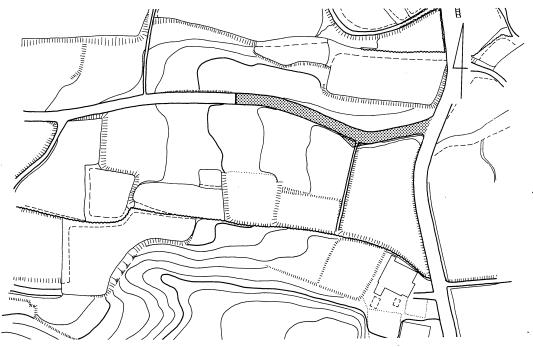
第3図のグリッド配置図に示したように、農道の拡張工事対象範囲内の平面発掘を実施した。 出土遺物は極めて少なかったが、小竪穴8基を検出調査することができた。しかし、幅員6mという制約された範囲の調査であり、すべての小竪穴を完掘することはできなかったとはいうものの、7基の小竪穴には規格性がみられた。

発掘はローム層上面まで行ったが、本遺跡における基本層序は次のとおりである。おおまかな 観察結果を記しておきたい。

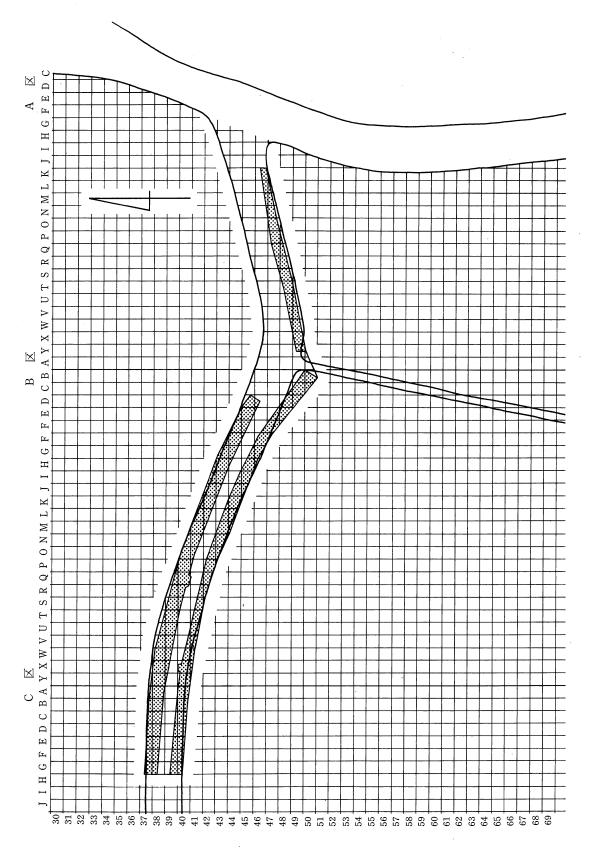
第 I 層 黒褐色土層 畑の耕作土層で18cm前後の厚さである。

第II層 黒褐色土層 10cm前後の厚さで第I層より黒色がやや強くなる。道路際のためか攪乱 された箇所がしばしばみられ安定していない。

第Ⅲ層 攪乱層 攪乱された時期はわからない。深いものでは第Ⅳ層に達している箇所もある。



第2図 臼ケ原遺跡発掘調査区域図・地形図(1:2,000)



第3図 グリッド配置図 --6-

第IV層 漸移層 ローム層からの漸移層で、A地区で部分的に認められただけである。

第V層 ソフトローム層 やはり認められた箇所は少ない。道路際では一切認められなかった。 第VI層 ローム層 小竪穴も壁でみる限りでは角礫を包含している箇所もある。

調査対象地域は旧道をはさんだ幅6mという制約された範囲であったが、実質的には、旧道の両側の極めて狭い範囲を調査しただけである。畑地よりも路面が低かったこともあり、第II層の説明でも記載したように、道路際は、農道ができた頃より長年にわたって、崩れたり流されたりしたように思えるし、その修復も行われたであろう。また、草や芝の根による攪乱も著しく、全体に不安定な土層で良くなかった。

Ⅳ 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構

発掘調査の結果、発見した遺構は縄文時代の小竪穴 8 基だけである (第4~7図)。便宜上それらの小竪穴には1~8の番号をふったが、制約された範囲内の調査で、完掘した小竪穴は2·6·7の 3 基と少ない。それらの小竪穴について若干の説明を記してみたい。

小竪穴1 (第4図、第5図1)

発掘区の北東、BC- $45\cdot$ BD-45グリッドから用地外にかけて、ローム層に黒褐色土の落込みを 3月2日に確認した。用地外にかかってはいたが、平面プランは推定できる状態で、円形を呈する小さな住居址とも思えた。しかし、3月6日に行った精査の結果、小竪穴であることが把握できた。

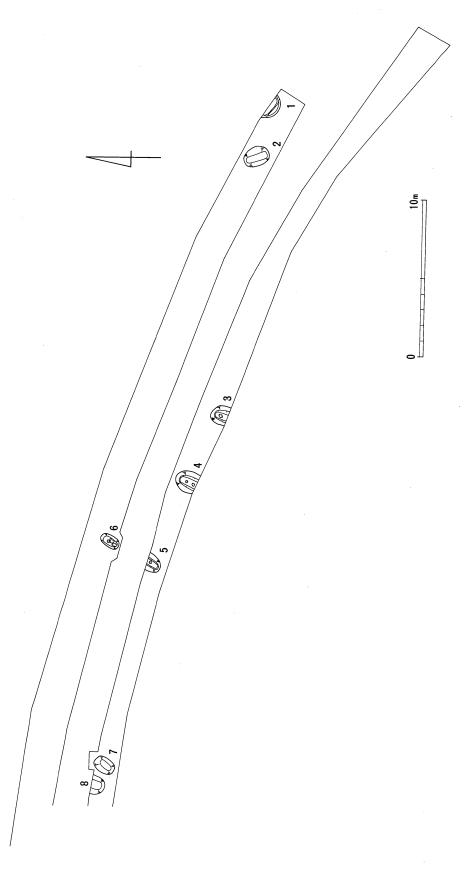
結果的には、南側の約半分を調査しただけであるが、壁の立ち上がりは二段となっている。その状態は、上段から中段まではあまり確っかりしていないが、中段から底にかけては確っかりしている。埋土の堆積は自然埋没したと思われる状態で、上層から黒褐色土・褐色土の2層に大別できた。底近くにはローム粒が混入していた。埋土の観察では攪乱および人為的な現象は一切認められず、壁が二段に立ち上がっていたが、二つの遺構が重複したものではない。

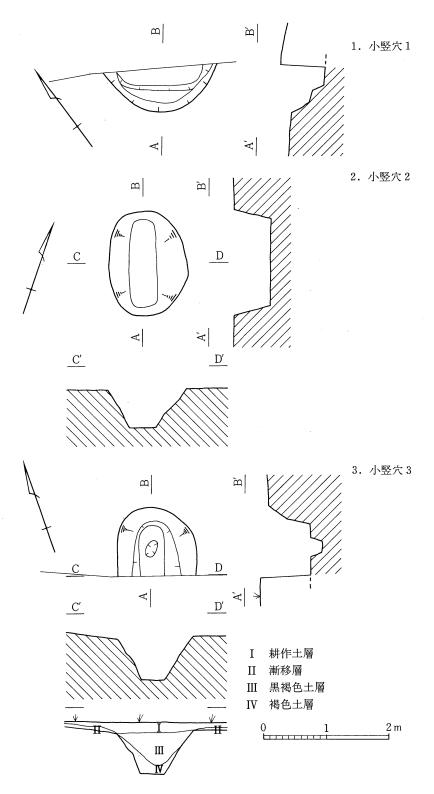
平面形は、径180cm位の円形と思われる。中段から底の形状は隅丸長方形ないしは楕円形となろう。底は平らであるがやや北に傾いている。深さは中段までは27cm、底までは45cmである。

平面形に違いはみられるが、中段および底の形状から小竪穴2~8と同様な施設とも考えられる。

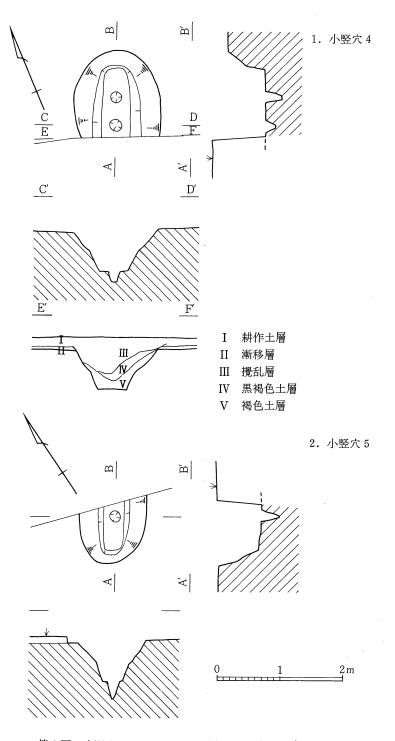
遺物の発見は皆無である。

小竪穴2 (第4図、第5図2)

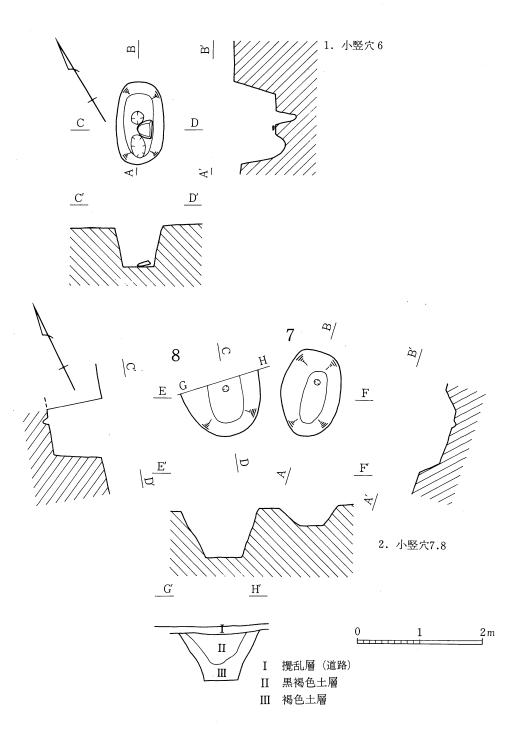




第5図 小竪穴1~3実測図・土層断面図(1:60)



第6図 小竪穴4~5実測図・土層断面図(1:60)



第7図 小竪穴6~8実測図・土層断面図(1:60)

小竪穴1の西方にあたるBD-44・BD-45・BE-44・DE-45グリッドで、3月2日にローム層に黒褐色土と褐色土の落込みを認め精査を行う。埋土の堆積はレンズ状となるが、上層から黒褐色土・褐色土の2層に大別できる。底近くの褐色土中には、壁土が落下したと思われるロームの塊と粒が多量に混入していた。その状態からみて自然埋没したものと思われる。なお、プラン確認面での埋土の観察は、外周に幅は狭いが褐色土がめぐり、その内側に黒褐色土が認められるという状態であった。これは、結果的には埋没した小竪穴の上方を輪切りにした時の状態である。したがって、当時の壁高は検出面よりも高かったことを物語ることになろう。

平面形は長軸162cm、短軸126cmを計る楕円形を呈するが、底は隅丸長方形である。壁の東西辺は確っかりした立ち上がりを持ち、ほとんど壁土の落下はなかったようである。南北辺は断面形でもわかるように、底から30cm位の立ち上がりは確っかりしているが、それより上はスリ鉢状となり、壁土の落下は著しかったようである。この状態からみると、当時の平面形は底の形状に近いものであったと思われる。深さは63cmで、底は平らでほぼ水平である。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴3 (第4図、第5図3)

旧道の南側のBM-43·BM-44グリッドから用地外にかかり、黒褐色土の落込みを3月3日に認め精査を行う。埋土の堆積はレンズ状となるが、上層から黒褐色土・褐色土の2層に大別でき、底近くの褐色土中には、壁土が落下したと思われるロームの塊と粒が多量に混入していた。その状態から自然埋没したものと思われる。

平面形は、北側の約半分を調査しただけであるが、完掘した小竪穴 2・7と同様の楕円形となろう。長軸は不明であるが、短軸は124cmである。壁の立ち上がりは底から30~35cmは確っかりしているが、それより上はスリ鉢状となり、壁土の落下は著しかったようである。深さは74cmで、底は平らでほぼ水平となるが、小穴がほぼ垂直に1個穿たれていた。小穴は長軸28cm、短軸17cmのタマゴ形を呈し、深さは20cmである。なお、小竪穴 4 の小穴のあり方からみると、本址の未調査部分にも小穴が穿たれていることは容易に考えられる。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴4 (第4図、第6図1)

小竪穴3の西側にあたるBO-42・BO-43グリッドから用地外にかけて3月3日に発見した。 上面が攪乱されていたため、小竪穴の存在を考えずに攪乱層を取り除く作業途上で、本址を認め 精査を行った。埋土の堆積はレンズ状となるが、上層から攪乱・黒褐色土・褐色土に大別できる。 底近くの褐色土中には壁土が落下したと思われるロームの塊と粒が多量に混入していた。その状態から自然埋没したものと思われる。

平面形は、全掘できなかったが推測できる状態で、長軸は推定190cm、短軸138cmの楕円形とな

ろう。壁の立ち上がりは底から32~35cmは確っかりしているが、それより上はスリ鉢状となり、壁土の落下は著しかったようである。なお、壁は攪乱による破壊もあるかもしれない。深さは66.5 cmで、底は平らでほぼ水平となるが、円形の小穴がほぼ垂直に 2 個穿たれていた。 それは径が19 cmで深さが20.5cmと、径が17cmで深さが29cmのものである。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴5 (第4図、第6図2)

小竪穴4の西側にあたるBQ-41・BR-42グリッドから旧道にかかる、黒褐色土の落込みを3月3日に認め精査を行う。道路による攪乱箇所もあり状態は良くなかった。埋土の堆積はレンズ状となるが、上層から黒褐色土・褐色土の2層に大別できる。底近くの褐色土層中には、壁土が落下したと思われるロームの塊と粒が混入していた。その状態から自然埋没したものと思われる。

平面形は、南側の約半分を調査しただけであるが、完掘した小竪穴2・7と同様の楕円形となろう。壁の立ち上がりは底から24~31cmは確っかりしているが、それより上はスり鉢状となり、壁土の落下は著しかったようである。深さは64cmで、底は平らでほぼ水平となるが、円形の小穴がほぼ垂直に1個穿たれていた。それは径が17cm、深さが30cmである。なお、本址は約半分を調査しただけであり、明確なことはわからないが、小穴が穿たれている位置からみて、1穴が穿がたれていただけであろう。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴6 (第4図、第7図1)

旧道の北、小竪穴5の北側にあたるBQ-40グリッドのほぼ真中で、黒褐色土の落込みを3月3日に認めた。南側の一部が旧道にかかっていたため、その範囲は旧道下の調査も行った。道路による攪乱はなはだしく良い状態ではなかった。埋土の堆積はレンズ状となり、上層から攪乱・黒褐色土・褐色土に大別でき、自然埋没したものと思われる。底近くの褐色土にローム粒の混入はみられはしたが、その量は少なく壁土の落下はあまりなかったようである。

平面形は、長軸131cm、短軸77cmとやや小さいが隅丸長方形である。壁の立ち上がりは確っかりしている。これが当初の形態により近いものであろう。深さは65cmで、底は平らでほぼ水平となるが、円形と楕円形の小穴がほぼ垂直に穿たれている。円形の小穴は径が19cmで深さは33cm、楕円形の小穴は長軸は36cm、短軸21cmで深さは18cmを測る。底面に一部分を接しやや傾いた状態で平板石が1個入っていた。その大きさは縦28cm、横24cm、厚さ6cmである。これは当地方で産出する輝石安山岩で、打痕・磨痕など人為的な痕跡は一切認められない自然石であった。したがって、遺物の発見は皆無である。

小竪穴7 (第4図、第7図2右)

小竪穴5の西方にあたるBX-50グリッドで、小竪穴8に隣接した状態で3月8日に検出し、精査を行う。埋土の堆積はレンズ状となり、上層から・黒褐色土・褐色土の2層に大別できる。褐色土中には壁土が落下したと思われるロームの塊と粒が多量に混入していた。その状態から自然埋没したものと思われる。なお、プラン確認面での埋土の観察は、外周に褐色土がめぐり、その内側に黒褐色土が認められるという状態であった。これは小竪穴2と同様に、埋没した小竪穴の上方を輪切りにした時の状態であり、当初の壁高は検出面より高かったことを物語っていよう。

平面形は、長軸138cm、短軸98cmの不整タマゴ形を呈する。深さは33cmと浅いが、壁はスリ鉢状になだらかに立ち上がっている。褐色土中にロームの塊と粒が多量に混入していたことを考え合わせると、構築当初の壁はすでに落下してしまっているものと思われる。底は平らでほぼ水平となるが、底面北寄りには径9cm、深さ5cmとやや浅い円形の小穴がほぼ垂直に穿たれている。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴8 (第4回、第7回2左)

小竪穴 7 の西側に隣接する。BX-40・BY-40グリッドから旧道にかけて 3 月 8 日に検出した。プラン確認面での埋土の状態は、外周に褐色土がめぐり、その内側に黒色土が認められた。これは小竪穴 2 ・ 7 同様に、埋没した小竪穴の上方を輪切りにした時の状態であり、当初の壁高は検出面より高かったことを物語っていよう。埋土の堆積はレンズ状となるが、上層から黒褐色土・褐色土の 2 層に大別できる。底近くの褐色土中には壁土が落下したと思われるロームの塊と粒が混入していた。その状態から自然埋没したものと思われる。

平面形は、南側の約半分を調査しただけであるが、完掘した小竪穴 2・7と同様の楕円形となろう。長軸は不明であるが、短軸は126cmである。壁の東西辺は比較的確っかり立ち上がっていて、ほとんど壁土の落下はないようである。南北辺は底から25~30cmの立ち上がりは確っかりしているが、それより上はスリ鉢状となり、壁土の落下は著しかったようである。深さは78cmで、底は平らでほぼ水平となるが、径 9 cm、深さ 8 cmとやや浅い円形の小穴がほぼ垂直に穿たれていた。

遺物の発見は皆無である。

以上が小竪穴のおおまかな説明であるが、どの小竪穴からも遺物の発見はなく、帰属時期の決定はできない。しかし、近隣の調査例から縄文時代早期のものと考えてさしつかえなかろう。

2 縄文時代の遺物

発掘調査では、黒曜石を3点発見したにすぎない。調査期間中にわずかな土器と石器を表面採 集している。それらの資料に若干の考察を加えてみたい。

土 器

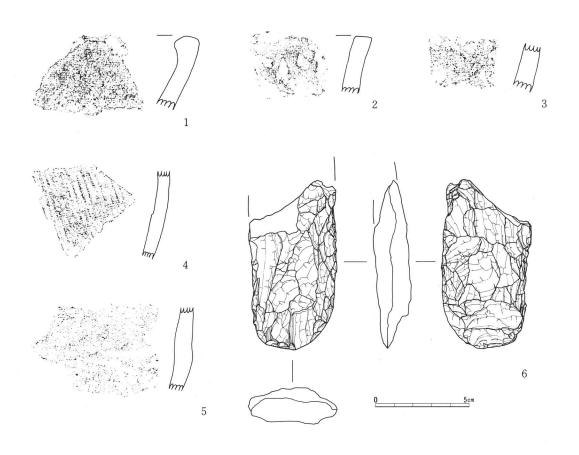
縄文式土器は9点ある。全て表面採集したもので、いずれも小破片で器形の判別できるものはない。

第8図1~3は素文土器であるが、1・2は口縁部破片で、2は器面が薄く剝落している。形状・胎土および焼成から中期中葉の曽利 I 式であろう。3は胎土および焼成から中期後半のものと思われる。図示していない6点は小破片の上、無文ないしは麾滅が著しいものばかりで、明確な時期を判別することはできないが、胎土および焼成から中期後半に帰属するものであろう。

石 器

第8図6は、表面採集した結晶変岩製の打製石斧で、基部側の約半分を欠損している。整形は 粗いが形態は整っている。当地方で発見されるものと、これといって違う点はみられない。縄文 時代中期の所産であろう。

黒曜石は図示してないが、発掘調査で出土した3点と、表面採集した6点の計9点あるが、取り上げて述べることはない。



第8図 土器拓影と石器実測図(1:2)

3 平安時代以降の遺物

全て表面採集したもので、小破片ばかりであるが、土師器・須恵器・灰釉陶器・内耳土器がある。

土器と陶器

土師器は小破片ばかり12点あるが図示してない。全て赤褐色を呈し、調整・焼成は比較的良いものばかりで、糸切底の認められるものもある。全て坏の破片と思われる。焼成は普通である。 第8図4は須恵器の破片で、叩き目痕がある。灰釉陶器も小破片のため図示しなかったが、高台 付碗の底部破片である。須恵器と灰釉陶器は各1点である。

第8図5は、内耳部分の破片でないため明確なことはわからないが、その胎土と焼成から内耳 土器の胴部破片と思われる。拓影にみられる沈線は焼成後に付いた傷痕である。

帰属時期については、全て小破片のため明確な同定はできないが、土師器・須恵器・灰釉陶器は当地方の平安時代後期の住居址出土資料と同様であることから、12世紀であろう。内耳土器については不明瞭な点が多く、ここでは中世の所産と考えておきたい。

Ⅴ 小竪穴について

本調査では、8基の小竪穴を調査したが、遺構説明でも記載したように、小竪穴1はその機能面においては同様であったことも考えられるが、平面形に際立った違いがみられたため、ここでは小竪穴 $2\sim8$ の7基についてふれてみたい。

まず、小竪穴の平面形であるが、楕円形(2~5・8)、タマゴ形(7)、隅丸長方形(6)に大別することができる。埋土の観察では、楕円形とタマゴ形は壁土の落下が著しいため、当初の形態を示しているとは思えない。隅丸長方形の小竪穴 6 も壁土は落下しているがその量は少なく、当初の形態に近いものであろう。それは小竪穴縁部と底面の形状がほぼ同じである点から考えると、少ない資料で問題点を残すことになるが、楕円形とタマゴ形の小竪穴も、底面の形状は隅丸長方形を呈し小竪穴 6 と同じである。したがって、壁土が落下する前の縁部の形状は小竪穴 6 同様に隅丸長方形を呈していたのであろう。

小竪穴の隅丸長方形を主軸と考え、主軸に目を向けてみると、第9図に示したように、小竪穴2以外は29度内に入り、ほぼ同じ方向を向いているということができよう。その僅かな違いは主軸方向が地形の等高線に対して、ほぼ直角に交差する方向を指しているためのようであり、構築場所の地形によって生じているようである。小竪穴2の主軸方向は、方位的にみるとたしかに違っていたが、視点を変え、等高線に直角に交差する方向を向いているという点では同じであり、全ての小竪穴が同じ条件で構築された施設であったといえよう。したがって、小竪穴の主軸は、地形と密接な関わりを持っていたことになる。これは小竪穴の性格を物語る大きなカギの一つに

なろう。同じ条件下で構築された小竪穴が単独で機能していたことは考えにくく、多くの小竪穴 があってはじめて機能した施設のようである。

しかし、調査範囲が限られていたため、調査区以外にも同様な遺構が埋没していることは容易 に考えられることであり、現状では小竪穴が遺跡内のどのような位置にどれ位構築されていたの かを把握するまでには至っていない。

小竪穴からは、帰属時期や性格を究明する上での手掛りとなる遺物の発見は皆無であった。性格については、遺構の特徴の一つでもある底面に穿たれている小穴を手掛りとして考えてみたい。 小穴は小竪穴2で確認できなかったほかは、その形状や大きさ深さ、数にこそ違いはあるが検

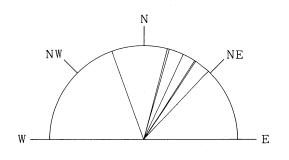
多くの研究者の研究では、このような施設はイノシシやシカなど大形動物を対象とした「陥し 穴」といわれ、底面の小穴は、陥し穴として有効に機能させるために、仕掛け用の竹や棒(槍)を さしたものとされている。近隣では岡谷市の扇平遺跡で、底面に小穴を持たない同様な遺構が10 基発見されている。その性格については陥し穴と考えていることからみて、本遺跡の小竪穴2も 小穴は確認できなかったが、陥し穴と考えてさしつかいなさそうである。なお、他の遺跡発見例 に目を向けてみると、小穴を持つものが圧倒的に多いようである。

陥し穴と考えたとき、本遺跡発見の小竪穴はやや規模が小さいようにも思えたため、第10・11 図に示したように、近隣の諏訪地方では富士見町の御射山・手洗沢、茅野市の御射山西・よせの台・与助尾根南・城之平、岡谷市の扇平の諸遺跡で発見されているものと、また東京都多摩ニュータウンの424・726・727・728遺跡で発見されているものと比較してみた。それによると、平面規模においては問題はなさそうであるが、深さがやや浅いようである。遺構説明のところでも記載したが、小竪穴2・7・8の壁高は検出した面よりも構築当初の方が高かったようである。その高さを加味してもまだ浅い小竪穴が多い。

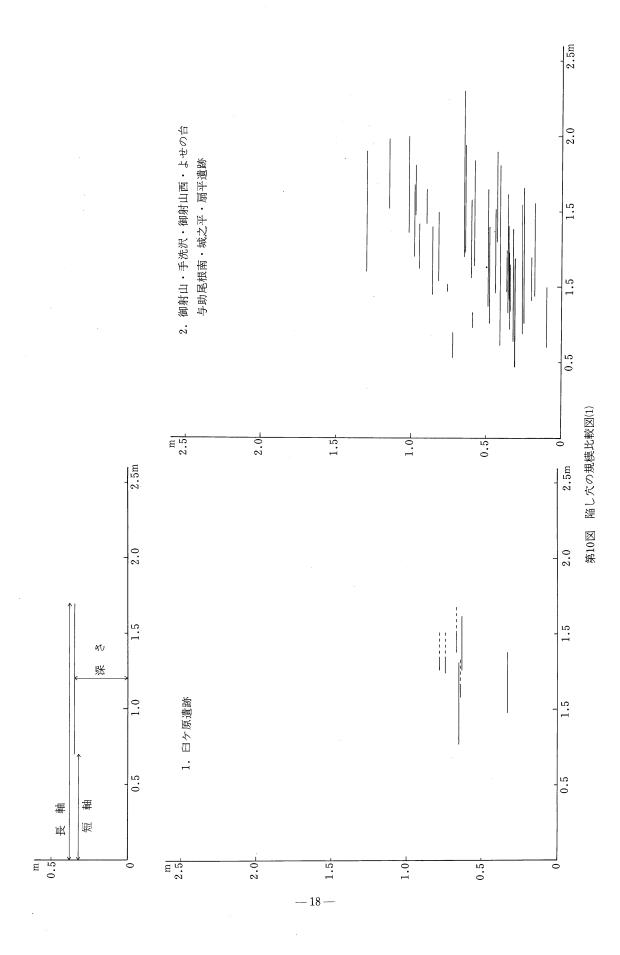
平面形が隅丸長方形を呈する陥し穴は、対象となる大形動物が何の方向から来てもその機能が発揮できるように作られたものではなく、動物の習性を考慮した上で方向を設定したことが考えられる。小竪穴の短軸方向の規模は、小さいもので77cm、大きいものでも138cmである。これは壁土が落下した後の数値であるため、構築時はまだこれよりも小さかったことになる。この数値で

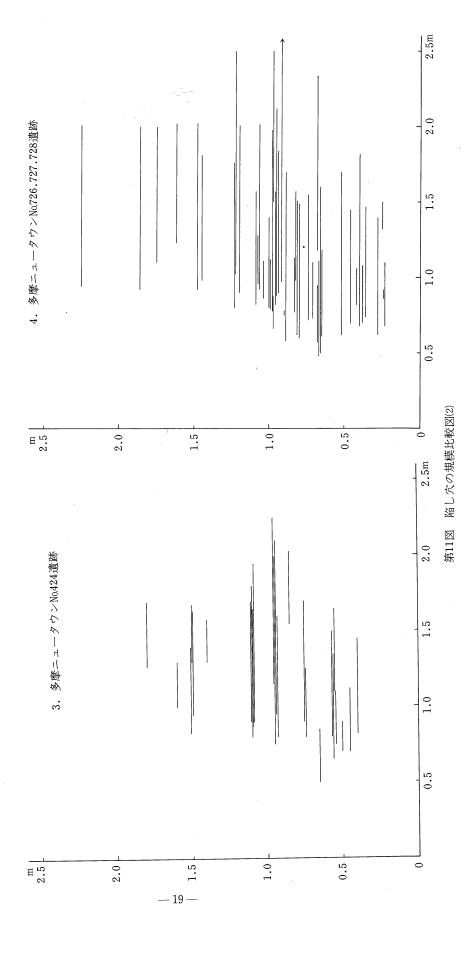
は、動物の体長に対しては小さすぎるようである。したがって、動物の進行方向と短軸が一致していても、十分に機能を発揮できたとは思えない。主軸である長軸と動物の進行方向が一致したと考えた方がより自然である。動物の習性についてくわしいことが判らないので、ここでは多くを語ることはできないが、長軸の方向は前記したように、等高線に直角

出できた。



第9図 小竪穴主軸(長軸)方向





に交差するという法則的な傾向にあり、対象動物をある程度限定していくこともできそうである。 幅が狭く細長い陥し穴は、落込んだ動物が容易に出られないための考慮であろう。それは、動 物の体長と穴の大きさが一致した方がより効果的な上に、底には槍がたてられていることなど、 平面規模が小さい上に浅く作られた陥し穴であっても、その機能が十分発揮できる工夫がされて いるようである。

Ⅵ 結 語

臼ケ原遺跡は、柏木区から阿久遺跡方面へ通ずる農道の拡張工事に伴って実施された緊急発掘 調査によって、その性格が判明した。

調査により、縄文時代早期に帰属すると考えられる小竪穴 8 基が発見されたが、土器・石器などの遺物は遺存していなかった。この種の竪穴に共通する特徴である。

小竪穴以外に際立った特徴を示す遺構は発見出来なかった。また、遺物も黒曜石3点を発見したにすぎず、遺跡の性格としては極めて希薄な状態であった。

しかし、分布調査や表採調査によれば、縄文時代中期の土器破片9点と打製石斧があり、また、 土師器・須恵器・灰釉陶器・内耳土器などが散見されているので、今回の調査地点の近くに縄文 時代中期の後半と平安~中世の遺構の存在の可能性を暗示している。

このように、今回の調査は、遺跡の中心部から外れた周辺部の状態を把握するのに有効な調査であったと結論づけておきたい。

引用参考文献

- 1966 尖石考古館 『蓼科』
- 1973 霧ケ丘遺跡調査団 『霧ケ丘』
- 1974 岡谷市教育委員会 『扇平遺跡 長野県岡谷市扇平遺跡発掘調査報告』
- 1978 茅野市教育委員会 『よせの台遺跡 埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』
- 1980 茅野市教育委員会 『与助尾根南遺跡』
- 1980 長野市教育委員会 『昭和54年度 八ケ岳西南麓遺跡群分布調査報告書』
- 1981 日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会 『昭和51・53年度 長野県中央道埋蔵文化財包蔵 地発掘調査報告書 茅野市その4・富士見町その3』
- 1984 東京都埋蔵文化財センター 『昭和58年度 多摩ニュータウン遺跡 (第3分冊)』
- 1984 東京都埋蔵文化財センター 『昭和58年度 多摩ニュータウン遺跡 (第6分冊)』
- 1985 富士見町教育委員会 『御射山遺跡発掘調査報告書 県道払沢富士見線改良工事に伴う緊急発掘調査。 査』

1985 原村役場 『原村誌 上巻』

発掘調査団名簿

団 長 松沢 達 (原村教育委員会教育長)

調査担当者 武藤雄六 平出一治

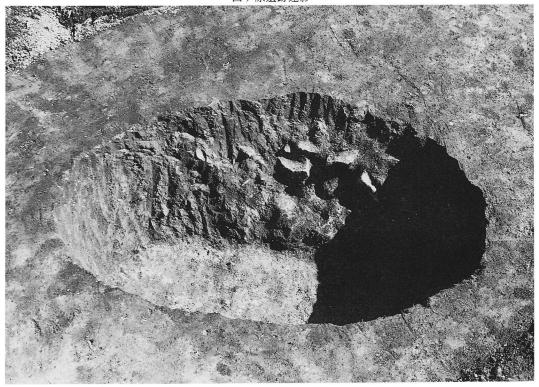
調 査 員 小林公明

調査参加者 小林ミサ 林やす子 牛山いねじ 堀内よし江 芳沢光世 芳沢つねよ 清水しげ子 清水つね江 清水たけよ 長林みね子 堀内美江 (順不同)

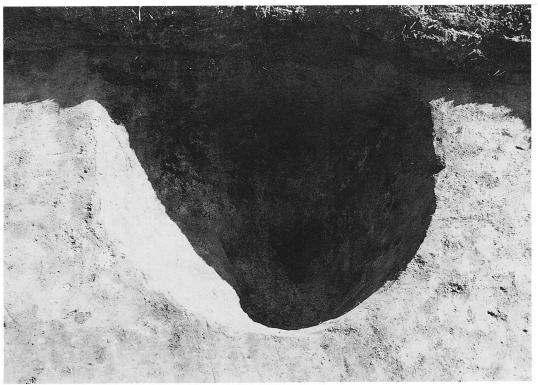
事 務 局 原村教育委員会事務局---行田竹輝(教育次長) 堀内久徳 牛山いさ子



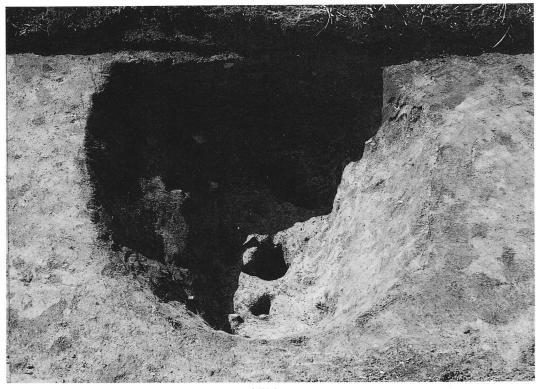
臼ケ原遺跡遠影



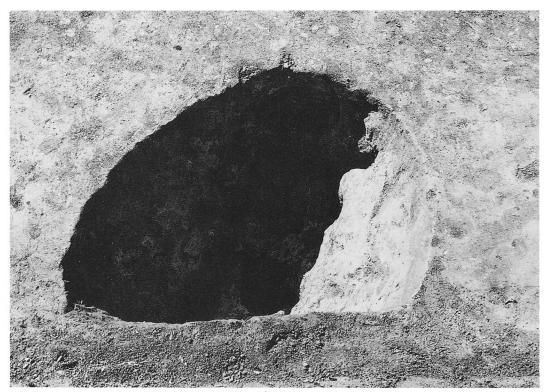
小竪穴2



小竪穴3



小竪穴 4



小竪穴 5



小竪穴 6



小竪穴7



小竪穴8

原村の埋蔵文化財 6

臼 ケ 原 遺 跡

村道改良工事に伴う 緊急発掘調査報告書

> 発行日 昭和62年3月 発 行 原村教育委員会 長野県諏訪郡原村

> 印刷所 ほおずき書籍株式会社

